

黒月姫、冒険への プロローグ



一条

「これで、トドメじゃあっ〜！」

黒月姫は象牙製の大き振りな印章を神の鉄槌の如く振り上げ、雷の如く振り下ろした。

アイオチ、黒月城の執務室に象牙製の印章とマホガニー製の頑丈な机が、来年の治水工事に関する予算の申請書を挟んでぶつかり、執務室を震わせた。

黒月姫は大きくのびして、机に突っ伏した。

「……終わった」

朝、机に自身から見て左手側に積まれていた書類の山が、すべて判を押し終わって右手側で山になっている。朝から机に座り、書類の内容を全く確認せず、ひたすら判子を押し押し押しまくった。限界まで素早く押し続けたにもかかわらず、昼をまわっていた。

右手が重い。単調な作業のしすぎで頭が痛い。あと空腹でおなかが痛い。ここ最近はいつもこうだ。朝から晩まで右から左へ判子を押し生活。まるで自分が腕だけの存在になったようだ。退屈で何の感動もない。まだ植物の方が代わり映えのある生活を送っているだろう。

机に突っ伏しながら、黒月姫は思う。いつまでこんな生活が続くのだろう。

姫だの陛下だのと呼ばれているが、実際やっていることと言ったら退屈で単調な事ばかり。これからの人生、ずっとこんなのだろうか。書類の山に埋もれ、印章を押しだけの簡単なお仕事。

日の当たらない執務室でこんな生活続ける内に、次第に苔がむしてくるのだ。私はそれに気づかず、今日も、そして明日も印章を押し続けるのだ。そして私は、知らず知らずのうちにそんな生活が当然になって、嫌だとも何とも思わないようになって、植物のように印章を押し続けるのだ。

……嫌だ。嫌だ嫌だっ！ 紙の山で苔むしておばあちゃんになるのは嫌だ。この狭苦しい執務室をぶち抜いて、私は此所にいると叫びたい。あらゆる家柄や地位を放り投げて飛び立ちたい。

鬱々とした気分で机に突っ伏していると、執務室の扉がノックされた。

「姫陛下、よろしいでしょうか？」

分厚い扉の向こうから、くぐもった声が聞こえてきた。この声は月影だろう。

月影は近衛の忍者達を統括している頭の忍者で、基本的に身辺警護を担当している。もっとも、そうそう族が侵入することなど無い。族が侵入するような事態になれば大失態だが、族が侵入しない限りその存在意義を示せない。何ともままならない仕事である。

月影が普段しているのは書類を持ってきたり、伝達を頼まれてきたりと、基本的に雑用である。

「……入れ」

「……失礼します」

白髪オッドアイの忍者頭は、黒月姫の不機嫌な雰囲気を感じ取ったのだろう、ひどく申し訳なさそうな顔をしながら執務室へ入ってきた。

そそくさと机に近づき、床に膝をつき顔を伏せた。執務室に沈黙が流れる。月影は黒月姫に用件を聞かれる事を待っているのだ。

王族に話しかけるのは不遜に当たる。また、見つめることも不敬に当たる。なので、月影は黒

月姫の方から声をかけられるのをじっと待っているのだ。

黒月姫は苛ついた。確かに、公式の場ではそうしてもらわねば困る。しかし、普段の生活中に何時もこれでは肩がこる。いちいち自分から用件を聞かねばならないのは面倒だ。

その忍者らしからぬ派手な容姿にかかわらず、月影はいちいち堅苦しくていけない。

「月影、面をあげい。——して、なにようじゃ。構わず申してみよ」

「——姫陛下。その、お忙しいのは分かっておりますし、大変申し上げにくいのですが、なにとぞご容赦していただきたく……」

堅苦しい割に、月影は気弱なところがある。言いにくいことがあるとすぐ、こうやって引き延ばそうとする。それが余計に黒月姫の神経を逆なです。

「……構わん。怒らないから、はよう申せ」

「ハイ。……こちらに、姫様に目を通していただきたい書類が」

月影がそう言うと、奥から部下の忍が台車に乗せた書類の山を押してきた。その山の大きさは朝から昼までで片づけた書類の山よりもさらに大きい。

「これを、全てわらわが？ わらわにやれと？」

「ハイ。これら全て、大変重要な書類となっております……。ちなみに姫様、これでも姫様のご負担をなるべく減らすべく、厳選して選ばしていただきましたものでして、これが最低限、姫様に目を通して頂きたく……」

「……せろ」

「はい？ 今なんと？」

顔を上げて月影は聞き返し、そして黒月姫から発せられる怒気に当てられ絶句した。

「とっとと、その山を置いて失せろと言っておるのが聞こえんか！ このドアハウ！！」

「ス、スイマセン！？ 失礼シマス！！」

月影は風の如く消え失せ、黒月姫は執務室に残された書類の山を前にして大きく一つ、ため息をついた。

再会

月明かりの差す自室のソファに寝そべりながら、黒月姫は本のページをめくった。もちろん先程まで相手にしていた、羊皮紙に書かれた堅苦しい、政治やら経済やら治水やらの専門書ではない。粗末な紙に印刷された庶民の読む娯楽小説である。

町にいれば幾らでも手に入れることのできる、このような小説だが、城の中で生活しているとなかなか手に入らない。

何故なら、この城の中に居ると庶民の本の話など拳がってこないし、そんな本について話すような相手が居ない。庶民の本を持ってこいと言うと「姫陛下のお読みになるものではありません」と拒否される。

この本は唯一の親友が持ってきてくれたものだ。話の内容は高い塔に囚われたお姫様を、勇者が救うという内容だった。それぞれの階に門番が居て、勇者は一人一人その個性豊かな門番を打ち倒し、塔を駆け上がって行くのだ。

警護される立場から言うと、門番全員で侵入者にあたれ！と思わなくもない。しかし、そんなことはどうでもよく、ただ姫の自由を奪う門番どもが叩きのめされる様が痛快だった。そして全ての門番を打ち倒した主人公と姫は結ばれるのだ。

このように、全体の三分の二がこの主人公と門番の戦いに費やされ、残りは主人公と姫の濡れ場だった。官能小説である。

庶民の読み物は無味乾燥な書類の山よりもずっとカオスで、不道德で、魅力的だ。親友の小説のセレクトはゲスいと思う。だが、それが良い。

「ふ～……」

本を閉じ、ソファに仰向けになりながら余韻に浸る。

黒月姫は思った。

「——族でも、侵入せんかなあ」

思わず心中が漏れた。

下に詰めている忍びどもをしばき倒し、城を駆け上がって私を攫いだし、知らないところに連れて行ってくれないか。退屈と束縛の城を打ち壊し、王の責務という重しを取り除いてくれないか。体に染み渡り私を憂鬱にさせるこの倦怠感を拭い去りたい。

この真綿で首を絞められる窒息感を何とかしてくれるのなら、もう、どうなったって良い。

黒月姫はふと、窓がいつの間にか開いて夜風が入ってきているのを感じた。ソファから起き上がる。その瞬間、全ての照明が落ちた。寝室内が月明かりのみの暗闇に照らされる。

「な、なんじゃ？」

突然暗闇に包まれ、黒月姫は言いようのない不安に包まれた。立ち上がり、誰か呼ぼうと声を上げようとした瞬間、後ろから抱かれて口を防がれた。

「——っ!？」

全身が電撃に打たれたように硬直した。頭が真っ白になる。

——待てい、聞いておらんぞ。こんなの。

黒月姫がその時感じたのは恐れと、恐怖と、そして期待の入り交じった未知の感情であり、彼

女はその感情を表す行動をとれずにただ固まるばかりだった。

時間にすれば一瞬後、黒月姫の耳元で聞き覚えのある声が囁かれた。

「姫、族が侵入したわよ。——どんな、酷いことをされたいの？」

「ジョアン、ジョアンではないか!？」

黒月姫は口を押さえる手を振りほどき、振り向いた。口を防いで、後ろから抱きしめられていたのはジョアン・ファームだった。ジョアン・ファームはもっとも信頼できる護衛であり、幼なじみであり、親友であり、父であり、母であり、姉であり、唯一の外への架け橋である。先程読んでいた小説もジョアンが持ってきたものだ。

「久しぶりではないか! 今までどこへ行っていたのじゃ!？」

黒月姫はジョアンに飛びつくように抱きついた。ジョアンは勢いのまま黒月姫を抱き上げ、そのままくるくると回る。

「色々と、野暮用があったのよ。黒月は元気だった？」

「おぬしが来てくれたから、先程までの憂鬱なんぞ吹き飛んだわ!」

「あら、こんな族で良かったのかしら？」

「ジョアン。おぬしは族ではない。わらわの勇者じゃ! 倦怠を吹き飛ばす、親愛なるわらわの騎士じゃ!!」

「あら、悪い子ね」

回転しながら二人は投げ出されるようにベッドへ倒れ込んだ。黒月姫はジョアンを見つめる。昔から変わらない月の色をした髪。密の色をした肌。人を魅惑してやまない瞳の妖しい輝き。昔からの、唯一の親友がそこにいた。

「久しいな。ジョアン」

「ええ。久しぶり、黒月姫」

黒月姫は数週間ぶりのジョアンとの再会を喜んだ。

後ろに回ったジョアンが服を脱がせやすいように、黒月姫は腕を上げた。

上着のボタンが外され、卵の殻を剥くように剥ぎ取られた。シャツのボタンを一つ一つ外し、同様に剥ぐ。スカートのホックを外し、ファスナーを下ろす。

ジョアンは脱衣所のカゴに、服を放り込んだ。

「ふ〜〜ん」

「ん？ 何じゃ、ジョアン？ じろじろと眺めるでない」

しげしげとこちらを眺めるジョアンに向かい、黒月姫は言った。

「黒月姫、あなた、少し見ない間に大きくなったんじゃない？」

ジョアンは主に鎖骨の少し下あたりを主に見ながら言った。腕を組み、下から押し上げるようにしてみる。確かに、以前より量感が増したような気がする。

「そういえば、最近服がきつい気がする」

「そうですね。駄目よ、立派なものに育ったんだから。もっと出しなさい。世にその胸の膨らみを見せつけるべきよ。その存在を世に示しなさい。ちょっと前までは視線がこう、胸で引っかからずに滑っていく感じなのに、大きくなって」

感慨深げにジョアンは言った。

「そう言うジョアンこそ子供の頃は——いや、あんまり変わらんか。お主は昔からそれくらいあった」

ジョアンとは本当に幼い頃からのつきあいだが、不思議と今の匂い立つようなスタイルの印象がある。

「まあ、私くらいになると、いつどんな時代だろうと視線を独り占めよ」

ジョアンは胸を反らしながら得意げに言った。黒月姫はそれはそうだろうと思った。実際、凄い。胸囲的に。

「ともかく、入りましょうか」

ジョアンは黒月姫の手を取り、風呂への扉を開けた。湯気と共に、檜の香りに二人は包まれた。黒月業の天守閣に設置されたこの風呂は間違いなくアオイチで一番眺めの良い風呂だ。眼下にアオイチを一望できる。

黒月姫はもし、この黒月城を自慢するとしたら、この風呂を自慢するだろう。もっとも、一般に公開しないし、この城には客人など滅多に来ないので自慢のしようがない。

普段この風呂は黒月姫と、湯浴みの世話をする湯女数人しか利用しない。今回はジョアンと二人で入るため、湯女を追い払ったのだった。

ヒノキのスノコを進み、黒月姫は桶を手にとった。

「ほれ。ジョアン、これを——」

黒月姫の差し出した桶が中を泳いだ。振り返ると、ジョアンは風呂に飛び込んでいた。盛大に拳がる飛沫が体にかかった。

「これジョアン、下湯を使わぬか。風呂に入るための作法じゃぞ」

言ってもジョアンは聞かないだろう、という諦めを含みながら、黒月姫は片膝を付きながら言

った。桶に湯をすくい、肩口にそっとかけた。

「堅苦しいこと言わないの。それに、お湯に飛び込むのも一つの作法なのよ」

「ん？ どこの作法だというのだ。そのような作法は聞いたことがないぞ」

湯にそっと浸かり、ジョアンの隣に浸かった黒月姫は聞いた。

「砂漠の地方では、水やお湯があれば飛び込むのが基本よ。砂漠を横断するために渴ききった砂漠の民は、オアシスを見つけると、喜びのあまり奇声をあげながらオアシスへ飛び込むのよ。一刻も早く水に飛び込みたいが為に、走りながら服を脱ぐの！」

「ほう！ 走りながらすっぽんぽんとな！ 砂漠の民は変わっておるな！」

「う～ん。砂漠の人たちはオアシスを見つけたら喜ぶだろうけど、裸で飛び込みはしないかな？」

ジョアンはしれっと言った。

「ウソかい！？」

渴いた体を潤すためにオアシスに飛び込み、水をかけあう砂漠の民の幻影が崩れ去った。

「いえ、それは少し違うわ」

ジョアンは大きく身を乗り出していった。

「あなたは了見が狭いわ。私が知らないだけで、もしかしたらいるかもしれないわよ。お湯を見つけたら飛び込む事で喜びを表す民が」

黒月姫の脳裏にオアシスで戯れる砂漠の民が復活した。限界まで渴いた植物に水を与えるとき、一気にみずみずしさを取り戻す光景が思い浮かんだ。その光景はとても感動的で、楽しそうだった。

「むむ、確かに、おぬしが見たことが無い、すなわち、実在しないと決まった訳ではないのかもしれないな」

「そうよ。その通り。物事の真偽を確かめるには知らなければ駄目よ。自分が知っていること、相手が知り得ること、世の中の仕組みを。そうしないと、あなたはいつまでたっても籠の鳥よ」

黒月姫は真っ直ぐに見つめてくるジョアンの視線から目を逸らし、うつむいた。波打つ水面に映る自分の顔は、泣き出しそうに波打っていた。

「わ、わらわとて分かっておるわ。今の立場なぞ。……飼い殺しじゃ。わらわに権威だけを残し、権力は全て大臣らのものじゃ。わらわはなにも決定しておらん」

そして自分と同じ『黒月』の名を付けた城に閉じ込め、ひらすら書類漬けにされている。私になにも決めさせない。誰とも合わせない。なにも相談しない。一つも口頭で説明しようとしな

。黒月姫は思う。わらわを小娘と思って虚仮にしておる、と。

「あなた、それで良いの？ ただ用意されてある、最高に豪華だけど誰でも座れる椅子に座っているだけの王座なんて——」

「ジョアン。よい。なにも言うでない」

黒月姫はジョアンが言い終わる前に遮った。

「わらわが傀儡であることはよく分かっておる。先王はわらわにとってよき父であったが、統治

の方法を教える教師ではなかった。元々わらわに王を継がせる気は無かったのだろう。政治の分かる腹心もおらん。——こんなわらわに民を任されても、手に余る」

「……姫」

「そんな顔をするでない、ジョアン。今の生活は退屈ではあるが、悪くはない。お主のような友もいるしな」

黒月姫は手で湯をすくい、顔を拭いた。ジョアンはそっと黒月姫の頭をなで、その背中を抱いた。背中に豊かな弾力を感じる。普段は奔放で活発という印象のあるジョアンだが、こういう時ふと彼女に母、という印象を受けるのだった。子供の頃から自分の先を行き、慰めてくれる。黒月姫にとってジョアンはそんな存在だった。

「そんなことよりジョアン、昔みたいに話をしてくれ」

楽しい話しや悲しい話し、苦々しい話からしょっぱい話まで。ジョアンに聞けばどんな話だろうと聞かせてくれる。ジョアンの手にかかれば、何でもない話がたちどころに輝き、味わい深いものになる。

「お姫様は、どんなお話がお望み？」

「なんでも構わん。ただ、忘れさせてくれ。色々なしがらみを」

黒月姫はそっと目を伏せ、耳元で囁かれるジョアンの話に身を任した。

「ほう、エリアスでそんなことが」

龍京のエリアス王室を襲った悲劇について、ジョアンはアーティストの如く朗朗と語った。身振り手振りを加えて、『イリス・イヴィエール一行』がいかにして、捕まえられていた仲間を救出し、アガシュラの企みに気づき、それをどの様に打破したかを情感たっぷりに語った。まるで見てきたかのようだ。

「お主、本当は実際に見てきたのではないか？」

黒月姫は思ったことを口にした。その話のディテールは見てきたを通り越し、まるで参加してきたかのようだった。

「違うわよ。この位、町にいれば自然と耳に入ってくるわ。姫は聞いて無かったの？ 今はどこでもこの話で持ちきりよ」

「あいにく、わらわはずっと城の中だからな。市井の話はお主くらいしか話してくれん」

ため息混じりに黒月姫は言った。城のものが持ってくるのは事務的なものばかりで、書類の先に民の姿は見えてこなかった。

「そう。なら、わたしは黒月にもっと市井のことを教えてあげないとね。何か、聞きたいことはある？」

「そうじゃな……そのイリス一行じゃが、結局何がしたいのじゃ？ 仕官か？ それとも、売名か？ 地位と名誉を求めておるのか？ 王族に恩を売れば大抵のことは思うがままじゃろうが

、結局そやつらは何を望んだのじゃ？」

どうにも腑に落ちなかった。話の中のイリス一行が何をしたいのかが分からない。囚われた仲間を救うのなら分かる。だが、仲間を救った時点で王族を救おうとする動機は分からない。所詮たびの者なので、愛国心からではないだろう。義侠心からというのも薄いように感じる。同情心を持つには王族相手には大きすぎるし、王に同情するなど不敬である。

「どれも違うみたいね。イリス一行はエリアス王室にとどまらず、このアオイチに向かっているみたいよ」

「こちらに……して、その目的はなんなのだ」

「さあ？ よく分からないわ。でも、そのイリス一行が民衆から支持を集めているのは間違いないわ。救世主と呼ばれているのを聞いたことがあるわ」

「救世主？ 救世主とな！？」

思わず声を荒げた。黒月姫にとってそれは聞き捨てがならなかった。

「ふんっ！ なにが救世主じゃ！ そもそも世なんぞ人がどうこう出来るものではないわ！ わらわがどうしようもなく姫であるように、世界なんぞどうしようもないものだ。それを救うなんぞ——不敬じゃ！」

「黒月、落ち着いて。……そんなに怒ることなの？」

「当たり前じゃ！」

黒月姫は叫んだ。

「そもそも救世主なんぞデタラメじゃ。世の中に危機がある？ 強大な悪があり、それを倒せば万事解決？ ——そんなわけあるものか！ 世界は元々不条理で、どうしようもないものじゃ。苦しみのない世界なんぞ狂人の頭の中にしか存在せんわ！」

手を胸の前に抱き、黒月姫は自分に言い聞かせる用にして言葉を続けた。

「世の中をただす、そのようなこと、人の一生では短すぎる。世を正すには人ならざる国を置いて他にない！ 人に救われるような世界なぞ幻じゃ！」

風呂場に黒月姫の訴えが響いた。いつの間にやら立ち上がり、思うがままに心中を打ち明けた。

「世の中を真に救うのは、国家、政治、つまり、わらわじゃ。わらわが毎日毎日腕が上がりなくなるまで印章をペタンペタンと押し続けているおかげで、世の平和が保たれているというのに……愚民どもは救いがたいわ」

「黒月、良いわよ。この際だから、もっとぶっちゃけてスッキリしちやいなさいよ」

「む、そうだな」

ジョアンに囁かれ、黒月姫はさらに続けた。

「そもそもわらわが、何でこんな退屈に耐えているかって、全て民のためじゃ！ 輝かしい青春をハンコ押しに費やしているのは、全て民のためじゃろう！ 決してポッとでの救世主一行なんぞではないわ！」

毎日繰り返されて尽きることのない義務。誰でも出来るにもかかわらず、自分にしか出来ない義務に追われる日々。正直うんざりだ。だが一方で王族としての、民への無限の慈しみが胸の内に確かにあった。

「.....だが、わらわは愚民どもを恨みはせん。わらわは愚民どもを愛しておる！ 無力で惨めつたらしい民のため、わらわは好みを捧げようぞ！」

ヒノキの香る浴室で、親友のみを証人として王である少女はその身を民に捧げると誓った。

出会い

「ジョアン！ ジョアンはおらぬか！？」

廊下を踏み抜くほどの勢いで歩く音を背景に、黒月城にその主の悲鳴に近い怒声が響いた。

「なにかしら？」

どこからともなくジョアンは現れた。その神出鬼没っぷりは、城に詰めている忍者どもより不思議なくらいである。黒月姫にとって今更驚くようなことではない。

「これを見よ」

「何、これ」

黒月姫の差し出した、白い表紙と裏表紙だけで中のページがないアルバムのようなものを受け取った。

「これ、何か血しぶきみたいなのがついてるんだけど」

真っ白の表紙には黒に近い赤色のシミがついていていた。元々のデザインではないだろう。予期せずついてしまったといった感じがありありと出ている。凶器、そんな言葉が連想された。

「ああ、それは正真正銘、血しぶきじゃ。それを持ってきた月影をそいつで殴ったときについたのじゃな……そんなことよりも中身じゃ。中身を見てもよ」

急かされ、ジョアンはそれを開くと、中を開くと写真が貼ってあった。生え際が背水の陣をきり、全体的にたるんだ肉体の中年男がキメ顔をしている写真だ。

「どう思う？」

写真の向こうから問いかける、黒月姫の表情は苦虫を噛み潰したかのような表情をしていた。

「どうって……まあ、豚にしては賢そうな顔をしていると思うわ」

「いやいや、よい豚は毛並みもよいものだが、これは毛が殆ど無いではないか」

写真を撮られた本人の預かり知らぬところでさんざんに言われる写真を指さして、ジョアンは再び聞いた。

「それで、この写真は何なの？」

「……見合い、写真じゃ」

「そういえば、黒月も今年で15、そんな話しもできる頃よね」

「冗談じゃないわ！」

廊下の床板が抜けるほど強く地団太を踏みながら叫んだ。

「まあまあ、落ち着きなさいよ。別に、断ればいいじゃないの。いくら何でも貴方が拒めばさすがに、向こうも強くでれないわよ」

極めてまっとうな正論で諫めようとするジョアン。しかし、黒月姫の暴論を諫める事はかなわなかった。

「わらわとて庶民と同じように、互いに好きあって、ただそれだけで結ばれようとは考えておらん！ そんなわらわの慈悲につけ込み、この仕打ち……ゆるせん！」

火を吹くように黒月姫は続ける。

「そもそも、何でわらわがこんな責め苦を受けねばならんのだ。ただあるがままに生きる。なぜそれが許されん！ 犬畜生に許されることが、なぜ許されん！ ……そもそも何で、わらわは

かり犠牲にならねばならんだ。逆じゃろう。民がわらわの為に汗と涙を流し、大臣どもが額を床に擦りつけ、わらわの慈悲をこう・・・これが世の正しい姿であろう。世の中、間違っておる！」

わらわが泣いて、庶民が笑うのがけしからなのであらゆる娯楽をとりつぶした上で働き続けないと払いきれないほどの税を課してやる。あの大臣の資産をすべて没収した上で、男娼に放り込んで掘ってもらおう。わらわに裁判を通さずに処刑できる権利を・・・などを呪いのようにつぶやく黒月姫をみかねたジョアンは控えめに言った。

「昨日、民にこの身を捧げるとか言ってなかったっけ？」

「確かに、民にこの身を捧げようとはいったが、じじいに操を捧げようとは言っておらん！」

童女のように胸に顔を埋めてくる黒月姫の頭を、ジョアンはそっと撫でた。

「ごめんね。何とかしてあげたいけど、所詮私は一介の護衛。この件に関しては、私にはどうしようもないわ」

胸に顔を埋めたまま、黒月姫は首を振る。

「.....そんなこと、知っておるわ。気にするでない。ただ、もう少しこのままで——」

ジョアンは黙り、そっと黒月姫の髪を撫でた。

黒月姫は桜が舞い散る湖の前で、ぼんやりと桜の花びらがたゆたっている様を眺めていた。

『今日一日くらいなら、貴方を自由にしてあげる』

ジョアンはそう言い、城から出る為の道を教えてくれた。今は城で自分の不在を誤魔化しているはずである。

どうやって誤魔化しているかは知らない。変装だろうか？ まあ、何にしてもジョアンならきっと上手くやっているのだろう。

もっとも、黒月姫は突然与えられた自由を持て余していた。

何をするでもなく、桜の美しさにつられてぼんやりと歩いている内に湖の畔まできていた。

水面にたゆたう花びらをみていると無性に虚しくなった。ただ落ちるに任せ、水面を漂い、そして沈んでゆく。

——いっそのこと、わらわも湖にたゆたってみようか。

その考えはとても魅力的に思えた。同じ沈むなら、政治や王族という枷にとらわれて沈むよりも美しい。

そんなことを考えていると、後ろから草をかき分けるガサっという音が聞こえた。

「——誰じゃ!？」

振り返ると、そこにはうなり声をあげる猛犬がいた。知らず知らずの内に、魔物の住む領域にまで足を踏みいってしまったらしい。

本能的な恐怖から、後ずさる。すると、靴が冷たい水に浸された。足下から冷たさが這いあがってくる。冷や汗がどっと吹き出した。

すぐ後ろは湖だ。逃げられない。かといって目の前には牙をむき出しにした猛犬がにじり寄ってくる。逃げられない。

黒月姫は猛犬から目をそらさないように後ずさった。本能がいつている。目をそらしたとたんに、襲われると。

後ずさるうちにどんどん水深は深くなってゆく。先ほどまで足首が浸かるくらいだったのが、ふくらはぎを越えようとしている。

「あっ」

後ずさった先に窪みがあったらしい。足を深みに取られた。しっかりとかみ合っていた黒月姫の視線が猛犬から大きくそれた。

抜けるような蒼天が、黒く獣臭い陰で覆われた。

猛犬にのしかかられるままに、全身が水中に浸される。

視界が青く染まり、世界から音が消えた。まるで血管に冷水が流れているかのごとく冷たい。

視界の端に猛犬の牙が迫っている。

あ、死ぬ——

自身に迫る死がまるで人事のように思えた。まるで自分の人形が襲われている様を眺めるような、不思議な感覚だった。

その感覚は不思議と怖くない。むしろ、どこか懐かしさを覚えた。

今までとなりあってきたものが、一步こちらに近づいてきた。そのような感覚。その時感じていたのは恐怖でなく、安らぎだった。

凍り付いた、しかし暖かな一瞬は突如として破られた。

地の底から延びてきた大きな力に突如としてさらわれる感覚。

水面がはじける音とともに、冷たい大気が全身を撫で回した。眼前に冷たい表情の精悍な男の顔があった。

黒月姫は思った。こやつは死神だと。自分を何処か暖かい、心安らぐ場所から冷たい地の底へ誘う地獄の使いだと。

その死神の視線はしかし、こちらを向いていなかった。その凍えるような視線は別のものに向けられていた。

その視線の先をだどると、その先には先程襲ってきた猛犬がいた。

猛犬は一瞬体を沈め、水面を蹴り飛びかかってきた。

「ひゃっ！」

黒月姫は腰にうねる力を感じた。どうやら腰に手を回され支えられているらしい。

その死神はどうやら短槍を持っていたようだ。腰の回転とともに繰り出された槍が、猛犬の横っ面を尻いで打ち飛ばしていた。

水しぶきをあげて水面に打ち落とされた猛犬に対し、無慈悲にも死神は追撃を加えた。

ぐるりと大きく槍を一回転させ、槍の握りを持ち変えると、「——スナイパーランス」とつぶやいて短槍を凄まじい勢いで撃ちだした。一筋の閃光を残して撃ち出された短槍は猛犬を貫き、

大きな飛沫を上げて湖に突き刺さった。

黒月姫はただ呆然と、突き刺さった槍を眺めた。

「——お怪我は、ありませんか？」

沈黙を破ったのは死神の方だった。黒月姫はハッと我に帰り、腰に回された手を振り払いった。そのまま二三步離れる。

改めて、目の前の死神をみると、それが人間だとわかった。よくよくみれば確かに、その無表情からは冷たさを感じるものの、整った顔立ちの青年だった。髪の色は明るく、瞳は澄んでいる。魔物のそれとは違った。

「.....お主、名はなんと？」

「レビ・アレンスと申します」

「レビ殿.....その」

口を開き何か言おうとするものの、言葉が出てこない。いったい何を言えばいいのか分からなかった。破廉恥な振る舞いに対する叱責だろうか？ 助けてくれた事への礼だろうか？ それとも、安らかな死を邪魔された事の差し出がましさを咎めるか。肯定の感情と否定の感情が入り交じった結果、自分でも思いがけない言葉がこぼれ落ちた。

「.....なぜ、わらわを助けた？」

その答えを本当に聞いたかったのか、自分でもよく分からなかった。ただ、聞くとしたらこの問い以外に何もなかった。

その問いに対し、目の前の男は戸惑うわけでも、笑うわけでも、怒るでもなく、こちらを真正面に見つめながらただ当然のように答えた。

「あなたは手を突きだし、抗っていたからです」

「.....そうか」

私は何だかんだ言いつつも、やっぱり死にたくなかったらしい。黒月姫は胸の内にたまっていたドロリとした霧が晴れたような気がした。

何はともあれ礼を言おうとその男に目をやると、なぜか上着を脱いでいた。たくましい胸板に呆然としていると、その男は上着を持ったまま近づいてきた。

「な、な、何をするつもりじゃ！ この不埒もんっ!？」

男の腕が上げられた。思わず黒月姫は目をつむる。予想していた衝撃は何時までたっても来ない。その代わりに、肩に暖かい感触があった。

「あ.....」

男の上着が肩にかけられていた。湖に浸かり、濡れ鼠になった自分を気遣ったらしい。黒月姫は途端に恥ずかしくなった。

「よ、余計なことをするでない！ ぶ、無礼であるぞ！」

「申し訳ない。ですが、大丈夫ですか？」

レビは至って平坦な口調で言った。

「な、なにを言う」

黒月姫は一步レビの方へ踏み出そうとすると、足がもつれた。あっという間に姿勢が崩れるが、すかさず抱き留められた。もたれ掛かるようにして、レビの胸元に手をつけて支えられている。いつの間にか、膝が笑っていた。自分でも滑稽なほど震えている。

「一先ず、湖から出ましょう。此所は冷える」

言うと、レビは黒月姫を抱き上げた。急に高くなる視線に驚き、思わず腕を回してしがみついた。レビは全く意に介さずに、浜の方へ歩き始めた。

——下ろせ、とは言えなかった。それを言うには、とっさに回してしまった腕の収まりが悪い。それに、人心地がつくと急激に寒くなってきた。濡れた体に、人肌が温かい。

「……泣いているのですか？」

「は？ 何を……」

黒月姫は目を拭くと、何か熱いものが手の甲に触れた。なぜだか分からないが、自分が泣いていることに黒月姫は気がついた。

「ち、違う、急に水に飛び込んだから、その水が目に入って……」

「そうですか」

全く意に介さないレビの反応を見ていると、黒月姫はふと馬鹿馬鹿しくなった。涙を見せるのは弱さを見せることに繋がる。そんな考えも、弱さを気にしないものの前では無意味だ。

ふと、浜の方から「レビ卿っ！ 大丈夫ですか～！？」という声が聞こえた。

「——そちの、連れであるか？」

黒月姫の問いに、

「そうです。あれは、イリス殿です」とレビは答えた。

「……知っておるぞ。お主が『イリス一行』とやらの——」

昨日ジョアンに聞いた救世主の一行。まさかこのような形で出会うとは予想外だった。黒月姫は流れを感じた。自分の今までの退屈ながらも安定していた生活が、一気に崩れ去る流れ。きつとこの出会いに乗ることで、全てが変わる。そんな音無き革命の鐘の音を、確かに聞いた。

「そういえば、まだ名乗っておらなんだな。わらわは黒月姫——黒月城の主じゃ。礼をしたいので招かれてはくれぬか？」

黒月姫の旅は、この出会いから始まった。